Respect
For
Dignity

R4Dとは、発信に関わるすべての人
（メディア関係者や組織の広報担当、アスリートや一般個人の
取材対象者、大学・研究機関に所属する研究者、教育関係者など）が、
“個人の尊厳を守る”表現を探し、学び対話するプラットフォームです。

アスリート×メディア

vol.001

個人の尊厳を守る表現を探す

Respect 4 or Dignity

目次

1.はじめに
2.わたしたちの対話と苦悩
3.取材時の
　コミュニケーション事例集
4.記事化における事例集
5.Key words
6.R4Dについて

はじめに

「勉強不足の記者に土足で踏み込まれた」「ステレオタイプなイメージを押しつけられた」「できあがった記事や番組で、取材対象者が尊重されていなかった」。これらは、女性アスリートや多様な性を生きる当事者が、メディア取材を受けた際に感じたことの一例です。昨今、ジェンダー課題や自身の性のあり方に対して声を上げるアスリートが増えてきました。一方で、コミュニケーションがうまくいかなかったり、取材側の知識が追いつかず、取材対象者が深く傷つくケースがみられます。

特にスポーツは、身体が関わる文化であるために、ジェンダー・セクシュアリティの話題とも切り離すことができない分野です。近代スポーツは、男らしさを競う文化として男性主導で発展した歴史があり、女性はそこに遅れて参加しました。「公平に競う」というスポーツの原則を守ろうとして、多くの競技は男女別に実施されてきました。一方で、よかれと思って守られてきたこの原則があるために、スポーツは性規範を根強く残し、ジェンダーバイアス※がなかなか解消されない文化として発展してきました。

しかし、時代は大きく変わりつつあります。国際社会では性に関する「多様性」が認識され、スポーツ界にもその認識が広がっています。スポーツという文化をジェンダーに敏感なまなざしで見つめ直す声が高まってきているのです。

そこで私たちは、アスリートと研究者、メディア関係者が協力し、誰も傷つくことのない、より心地良い報道とはどのようなものなのかを考えるメディア勉強会を実施しました。この勉強会で参加者が気づいたのは、報道される側である当事者だけでなく、報道する側であるメディア関係者もまた、無意識に行われてしまう差別や偏見を含んだ報道を避けるために苦闘し、葛藤を抱えているということでした。

どんなに注意を払っているつもりでも、理解しているつもりでも、報道が偏見や分断を助長する可能性がある……。萎縮せず、当事者であるアスリートのありのままを伝えるためには、お互いに知識をアップデートし続け、理解を深めることをあきらめずに進む必要がある。これが勉強会に参加した私たちが見つけた答えでした。

このハンドブックは、アスリートやスポーツの報道に携わる関係者が共に考え、行動するための参考資料となることを目指して作成されました。メディア報道には、人や社会を動かす大きなチカラがあります。そのチカラがスポーツにおける個人の尊厳を守るために発揮されることを強く願っています。絶対的な正解はないけれども、答えを見つけることをあきらめず、より良いものをめざそうとするのは、スポーツを支えるマインドです。スポーツマインドにあふれたスポーツ報道がスポーツ界の未来をつくり、インクルーシブな社会の実現につながると信じています。

※性別による役割について固定的な観念を持つこと

文章：綿貫大介

來田享子

中京大学教授。スポーツにおける/スポーツを通した人権の尊重をジェンダー視点から研究。日本体育・スポーツ・健康学会、日本スポーツとジェンダー学会会長。日本オリンピック委員会理事、日本陸上競技連盟常務理事等。

PROLOGUE

わたしたちの対話と苦悩 前編

イラスト：ヤマグチナナコ

わたしたちの対話と苦悩
後編
今日取材だ！
よろしくお願いしまーす！
質問票読みました！
答えにくい項目は答えなくて大丈夫です
よろしくお願いしまーす！
まず、ご自身はいつから競技を…
小学生のとき…
そういうことも…
そうなんですよ
今のお話はパーソナルなお話へと思いますが…書いて大丈夫です？
はい大丈夫です
個人名はナシで
取材は以上です！ありがとうございました～
はーい！あ、あの…
事前に確認してもいいですか～!?
ハモりましたね～

まだ少し不安だから、勉強会に参加したPさんに相談しよう！
書き終わった～！
意見もらえますか？
OK！
したよ！
あ…そっか 不安なんです
不安なことはあるけど…みんなで作っていこうね
助かります！
原稿確認中
お、反映する！
この部分は直してもらおう
口語のままだと誤解されそう…
この部分は修正したいです！
あ、届きました！
たしかに、この部分はこうした方がいいですよね～
修正反映しました！ニュアンス合ってますか？
確認しますね
反映確認しました！あとここも…
了解です！
発行！
良い記事になってよかったなあ～
嬉しいな
良い反響がたくさんきた
すごく良い記事
読んだよ！
安心して読めた
どんな取材だったの？
すごく尊重されて
最後まで丁寧だったよ

取材時のコミュニケーション事例集

文章：ヒラギノ游ゴ（ヒラノ遊）

お互いが安心して取材を進めるためのコミュニケーションのポイントを紹介します。

プロナウン（代名詞）の確認

ここでいうプロナウンとは主に一人称と三人称のこと。本題に入る前に、インタビューイーが自分をどう表しているのか（私、僕など）、こちらからはどう表すべきなのか（彼女、彼など）を確認しましょう。記事化を見越して、表記も含め確認しておくとよりスムーズです。一例として、コラムニスト・タレントのマツコ・デラックスさんは、ある媒体のインタビュー記事で属性を誇張するような「アタシ」という一人称をあてがわれ、不本意な思いをしたことがあると語っています。

共感の示し方

反射的に「わかります」といった相槌を打ってしまいがちですが、特にマイノリティとして生きてきた人を相手にする場合は、軽率な共感の意思表示は信用を損なうおそれがあります。「表面的な理解でわかった気になっているんじゃないか」という疑念を抱かれないよう、信頼関係を育む意識を大事にしましょう。

中断の合図の設定

歯科医から「痛かったら左手を挙げてくださいね」といったことを言われた経験はないでしょうか。取材時にも同じように、つらいときに出す合図を決めておくことをおすすめします。「答えたくない質問があったり、話していてつらくなったりしたら合図を出してほしいです」と事前に伝えておくといいでしょう。合図の例としては、左手を挙げる、「スキップ」といった合言葉などです。また、合図が確認できたら必ずインタビューを中断することを声に出して約束してください。

なるべく1対1を避ける

1対1の閉じたコミュニケーションは、逃げ場がありません。そのためハラスメントが起きやすく、またハラスメントがあったこと・なかったことを証言できる第三者がいない状況です。記者とインタビューイーの1対1にならざるをえないとしても、他にも利用者のいる空間を選んだり、会議室で実施するならば退路が確保しやすいよう扉側の席に案内したりといった配慮が望ましいといえます。話しやすいと思える環境や条件は人それぞれなので、どういったロケーションだと話しやすいか、事前に本人から聞き取りをしておくのがよいでしょう。また、こうした心がけはメールなど対面以外のやりとりでも同様です。CCに別のスタッフや相手側の協力者を入れることを提案してみるのもよいかと思われます。

原稿チェックの可否を相談しておく

報道の不文律として、インタビューイーからの原稿チェックを固辞する慣習は根強く残っています。しかし、インタビューイーの人権を侵害する危険性や、記事への批判を誘引することもあり得ます。よりよい表現を模索するためにも、本人チェックの過程を経ることが望ましいといえるでしょう。ただ、社内ルールや放送法によって事前の確認ができない場合もあるので、それらを踏まえながらインタビューイーや読者、視聴者の権利を侵害しない表現・方法を模索しましょう。そのうえで、希望を尊重した記述に書き改めることができるところ・できないところのすり合わせを丁寧におこないましょう。

インタビューイー側の認識が不適切なパターン

インタビューイーの発言の中に、用語の認識が不正確なものがあったり、メディアとして賛同しかねる信条の発露があったりということがありえます。例えば、インターネット上の俗説やデマに影響されているととれる場合などです。そういった場合、なるべく元の発言は活かしたうえで、問題となりそうな箇所の認識をすり合わせる、折り合いをつけるのが難しそうであれば別の話題に差し替えるといった対応が必要になります。行き違いを避けるため、この点においても合意形成が重要になるでしょう。

記事化における事例集

文章：ヒラギノ游ゴ（ヒラノ遊）

すでに多くの人の目に触れることになっている実際の記事にも、見直す必要があるかもしれないポイントが見つかります。用語の使い方、読者や視聴者が当事者にどのような印象を与えるか…など、記事を書く際、校正をする際のアンコンシャス・バイアスに気づく手がかりとなる事例集です。

事例1　元原稿

今回お話を伺ったのは、都内でWebデザイナーとして働く尊厳マモルさん。

① 長くストレート女性として自分を捉えていましたが、数年間改めて自分と向き合う期間を経て、ノンバイナリーとして生活しています。

ノンバイナリーは、男性でも女性でもない性のあり方。近年少しずつ認知されてきている新しい概念です。②

マモルさんは、近年悪化の一途を辿るネット上でのトランスジェンダーへの攻撃に……

1 属性の表記は慎重に

この「ストレート」という表現は、マイノリティ当事者への蔑視を助長しうる表現のため、避けるのが望ましいといえます。いわゆるマジョリティにあたる属性だということを述べたいのであれば、性指向の面では「ヘテロセクシュアル」、性自認の面では「シスジェンダー」といった表現があります。2つ合わせて「シスヘテロ」という表現もよく使われているものです。いずれの場合も形容詞なので、人を指す場合は「ヘテロセクシュアルの人」「シスジェンダーの方」「シスヘテロ女性」といった表記が望ましいでしょう。

また、ジェンダー・セクシュアリティに関する用語には、意味する範囲が重なるものが数多くあります。

しかし、定義や前提、ニュアンスはそれぞれに異なります。インタビュイーのアイデンティティに紐づくものでありうるため、丁寧な使い分けが必要です。

メディアがその点を十分に認識しないまま表記統一のルールを定めてしまうと、インタビュイーの属性を歪めて表現するおそれがあります。例えば「シスヘテロ」を「ストレート」、「ノンバイナリー」を「Xジェンダー」、「トランス女性」を「MtF」にと、表記を統一することで失われるものがあるということです。

原則的にインタビュイー自身が使用している名称を尊重しつつ、別の表現に差し替える必要を感じるのであれば、インタビュイーとの合意形成を欠かさないようにしましょう。

2 “新しい”存在なのか？

性のあり方について「新しい」という書き方には特段の注意が必要です。これまでにも存在していたのに、気づかれてこなかったり、社会がそれをなかったことにしてきただけ、というケースが往々にしてあります。主語を一般的にしすぎていないか・指し示す範囲が正確かを精査しましょう。

この例文の場合、「新しい」の代わりに何か別の表現を、と考えるのではなく、ただ「新しい」をトルツメするのが最もシンプルな解決策といえるかもしれません。

また、断定形を避ける書き方の引き出しをたくさん持っておくことも大切です。「～だと捉えることができる」「～と見なされてきた」「～となりうる」といったものが有効かと思われます（この言い回しもそうですね）。

事例2　元原稿

③
マモルさんは、近年悪化の一途を辿るネット上でのトランスジェンダーへの攻撃に晒されたことを受け、あるプロジェクトを発足しました。プロジェクトの過程では、さまざまな困難に直面したといいますが、「誹謗中傷には屈しない。むしろ、他の当事者に矛先が向くくらいなら全部私に来いとすら思う」と強気な姿勢を崩しません。④

③ 前提を注釈で補う

このままだと前の文からの繋がりがわかりにくくなっています。ノンバイナリーがトランスジェンダーのスペクトラムの中に位置づけられる（派生形の一つとされる）ことがあるのを注釈で補うと、より文の通りがよくなります。
また、トランスジェンダーへのネット上での攻撃についても、もう少し詳しい補足があればより多くの人に届く記事になるでしょう。
例えば、トランスジェンダーは歴史上常に危険にさらされてきたこと、近年の日本でいうと2018年にお茶の水女子大学がトランスジェンダーの学生の「受け入れ」を名言する声明を出したことを1つの大きな契機として、ネット上で誹謗中傷やデマの拡散が激化していることなどに触れておくと、読者の理解の助けになるかもしれません。
ただ、そもそも知識がなければこうした注釈を書き足すことができません。性に関する記事を書くうえでは、記者が常に情報収集に努める、あるいは専門家の監修を受けられる体制を整えることがいっそう重要になってきます。

④ インタビュイーを矢面に立たせない

多様な性を自認する人へのインタビューでは、インタビュイーが誹謗中傷を受けるリスクに一際注意深くなることが求められます。
メディアとしてインタビュイーを守る責任を果たすため、本人の発言を尊重しつつ、矢面に立たされないよう表現を調整しましょう。
ポイントとしては、個人の意見として収束させず、社会全体の抱える問題として着地させる書き方、また他にも同様の意見を持つ人がたくさんいると示し、孤立した印象を与えないことなどがあげられます。
また、文中でインタビュイーの発言がどのように記述され、どのように表現されているのか、本人チェックの過程で忌憚ない意見を伝えられるよう、信頼関係の構築に努めましょう。
この例文でいえば、「誹謗中傷には屈しない」までで留めておくか、別の話題を膨らませるかといった検討が必要になってくるかと思われます。

Key words

文章：Ai Tomita　イラスト：ワタミユ

キーワード

人間の多様な性を理解し、個人の尊厳を守るために必要な知識をキーワードで紹介します。今はまだキーワードになっていないような個人の属性もあるため、誰かのストーリーを紹介する際には無理にキーワードにその人の存在を押し込めないことにも注意が必要です。

SOGI／SOGIE

「性的指向（Sexual Orientation）」「性自認（Gender Identity）」「性表現（Gender Expression）」の頭文字をとった総称。性のあり方を認識し、誰もが自分ごととして捉え、性の多様性を認め合う上で重要な概念。

出生時に割り当てられた性

（戸籍上の性別）

身体的な特徴に基づいて割り当てられ、戸籍に記載される性別のこと。日本の法律上では「男」「女」の表記しか存在しないため、男/女以外の性自認の人たちが公的な場（役所や病院など）を利用する際のハードルが生じることになる。

性自認

自分自身が認識する性のこと。出生時に割り当てられた性別とは関係がなく、流動的な場合もある。社会との関係性の中で形成されていく「帰属意識」。生まれた時に割り当てられた性別と自分自身が認識・実感する性別に違和感を抱いたり、異なる人、変化していく人、どちらか決められない人もいる。

性別不合　（旧：性同一性障害）

出生時に割り当てられた性と性自認が一致しない状態。精神疾患の診断・治療に主眼を置く「医学モデル」に基づき「性同一性障害」と呼ばれてきたが、世界保健機構（WHO）が作成する国際疾病分類では2019年に「性の健康に関する状態」を表す「性別不合」に変更された。日本学術会議は2020年に、従来の医学的な理解から性自認のあり方を尊重する「人権モデル」へと考え方を転換させ、脱病理化をめざすことを提言している。

性同一性

ある時点での性に関する自分自身の認識は、本人の変化（成長）、置かれた状況、他者との関係の中で持続したり変化したりする。このような性自認の連続体を「性同一性」という。割り当てられた性別と自認する性別が同じであるという意味ではない。

性的指向

どのような性のあり方の人に性的に惹かれるか（または惹かれないか）性愛の向かう相手・向け方のこと。「嗜好」「志向」は間違い。異性愛者を意味する「ストレート」「ノーマル」などの言葉には、異性愛を基準にその他の性的指向を“普通ではない”とみなす意味合いが含まれるため「ヘテロセクシュアル」という言葉を使用する。

シスジェンダー

出生時に割り当てられた性別と性自認が一致する人のこと。

Xジェンダー／ノンバイナリー

性自認が性別二元論に当てはまらない人。男女どちらでもない、男女どちらでもある、あるいは当てはめたくないといった認識を抱く人々のことを指す。Xジェンダーは主に日本のみで使われている言葉だが、どちらの言葉を使うかは当人次第。その人が使用する言葉を用いましょう。

トランスジェンダー

出生時に割り当てられた性別と性自認が異なる人のこと。性別二元論に当てはまらない性自認の人も含まれる。医療用語の「性別不合（旧：性同一性障害）」とは異なる。性別適合手術やホルモン治療を受けるかどうかは本人の意志で決めることであり、「トランスジェンダー」を見分けるための基準ではない。

デッドネーミング

本人が使用しなくなった名前（戸籍上の名前等）を本人の合意なく使うこと。トランスジェンダーやノンバイナリーの人の中には、出生時につけられた性別を示唆するような名前を伏せて通称名を使用、あるいは戸籍上の名前を改名するケースも少なくない。

カミングアウト／クローゼット

自分の性のあり方を本人の意志で他者に伝えることを「カミングアウト」、公表していない状態を「クローゼット」と呼ぶ。LGBTQ＋コミュニティの中で浸透・定着した言葉。

アウティング

意図的か無意識かに関わらず、同意なしに他人の性のあり方を勝手に言いふらすこと。「カミングアウト」を強制するような行為も含まれ、ときに人の命を奪う。本人が伝えている／伝えていい範囲の確認が必要不可欠。

ミスジェンダリング

意図的か無意識かに関わらず、ある個人を指したりその人と接したりする際に、本人が自認するジェンダーと異なる取り扱いをすること。ミスジェンダリングをなくそうとした結果、アウティングしてしまうことがあるため、本人にどう呼ばれることが安心できるかの確認が必要。

DSDs Differences of Sex Development

生物学的な意味でのからだの性の様々な発達。「『これが女性の身体の構造・これが男性の身体の構造』とされている固定観念とは、生まれつき体の状態が一部異なる女性・男性」のこと。医学的には「性分化疾患」、一部の欧米の政治運動では「インターセックス」とも呼ばれているが、当事者の人々はそのような包括用語をアイデンティティのようにされることを拒否しており、「アンドロゲン不応症」や「ターナー症候群」などの身体状態を「持っている」と認識している。「両性具有：男でも女でもない性」「男女区別がつかない人」「男女両方の特徴」「からだと性は区別できない」という誤解・偏見があるが、そのような表現は現在では侮蔑的表現とされている。

ABOUT

R4D公式Webサイト

R4Dの公式Webサイトでは、ワークショップのお知らせやレポート、ハンドブックには掲載しきれない多くのキーワードを紹介しています。随時、最新の情報をアップしていく予定ですので、ぜひチェックしてみてください。

R4Dでは取り組みに関する取材、同じ目的を持ったさまざまな企画への協力に関してだけではなく、取材時の対応に関して困ったり、悩んだりした時、どこに相談したらいいかわからない時などのお問合せも受け付けています。お気軽にご連絡ください。

デジタルデータ

R4Dハンドブックのデジタルデータと個人への取材が決まった際に確認を推奨するチェックシートを配布しています。ぜひご活用ください。

CREDIT

R4Dプロジェクト実行委員会

企画・監修
下山田志帆　來田享子

コンテンツディレクション・編集
中里虎鉄

制作プロデュース
大谷明日香

アートディレクション・デザイン
高垣美月

表紙背景グラフィック提供
MACCIU

ハンドブック制作

導入ページ文章
綿貫大介

漫画ページイラスト
ヤマグチナナコ

コミュニケーション例文章
ヒラギノ游ゴ（ヒラノ遊）

校正例文章
ヒラギノ游ゴ（ヒラノ遊）

キーワード文章
Ai Tomita

キーワードイラスト
ワタミユ

ページデザイン
高垣美月　山田開生

Web制作

ウェブサイトデザイン
加山美羽

ウェブデベロップメント
石黒宇宙（gm projects）